

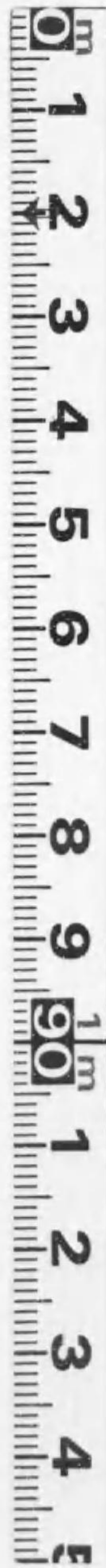
特114

864

正雄述

断片語

maigo



始



特114
864



高橋
可雄
述

大正
15. 6. 25
内交



高橋正雄著



○本書の装祢は福岡市の藤崎邁象畫伯が、好意的に揮毫して下さつたもので、光と愛と、力とを象徴したものださうです。

○高橋正雄著と
なつてゐるのは、述であるべきです。手紙でお頼みしたもので、どうかして間違つたものと思ひます。編者から御断りしておきます。

○トピラのペン字は正雄先生の筆跡であります。

はしがき

重美さんが私の書いたものや、話した事を、本にし度いと云ふ話は、随分永い事である。日記様のものを整理した事もある。講演を筆記した事もある。幾年かに亘つて、相當の勞力を費して居る。それがいつも頓挫して、未だに一冊もよう出さない。それを思ふと、私は心が暗うなる。それが今度は、極めて手取早い事にして、小冊を出す事になつたのである。これ迄に私が書いたものや、話した事の中から、重美さんが抜き書きして集めたものである。これがどれだけの價值があるものか、私には分らないけれども、只私は成るだけ多くの方が讀んで下されば、重美さんが喜ばうと思ふだけである。重美さんは、金も欲しいと云つて居る。その方からも、多く買つて貰へば喜ぶわけである。

それこれ考へるかして、重美さんは、私にこの冊子に載せる爲めに、新たに一文を

書いて呉れど、頼りに求める。前に述べる様な譯で、私は重美さんの考へて居る事が、スラ／＼と進んで行つて、同君の生活が確實に幸福になつて行く事を祈るものであるから、自分で出来る事だけの事はし度いと思ふのである。しかし、同君もアセつてはいけないと思ふ。又人を利用してはいけないと思ふ。イヤ、人を利用してやうとしても、出来るものではないのだから、その事をよく知つて欲しいと思ふ。自身の幸福は、自身が作つて行くより外はないのであつて、人に助けられる事も出来ねば、人を助ける事も、出来るものではないのである。

この冊子を出す事にしてからが、私が骨を折つたり、盡力したりしたのでは、それは私の幸福を増し、私の生活が進むだけであつて、重美さんの爲めに、少しもそれになるのではない。又重美さんが、これを出す爲めに働いた丈は、重美さんの生活の内容となり、幸福の材料になるのであつて、誰れのものにもなるものではない。

私が重美さんを助ける事も出来ねば、重美さんが、私を助ける事も、出来るものではないのである。重美さんは時々私に不足を云ふ。私が助けて呉れぬと思ふらしい。自分が弱く、淋しい爲めに、そんな事も思ふのであらうと、私は深く察する。無理を云ふとは思はない。してくれと云ふ事で、私の出来る事はする事もある。けれども、それは、決して私が重美さんを助ける事になるのではないのだ、私が私自身の生活を、幸福にして行く事になるだけで、重美さんの爲めに決してなるものではないのである。だから、時としては、重美さんが、幾らしてくれと云つても、斷乎として私はせぬ事もある。先程も私に月刊の雑誌を出してくれと云つて、頼りに、せがんで居た、私は明らかな返事をせなんだ。同君がその事を私に頼む心事に、迷ひがあると私は見るが故である。

月刊雑誌を出すと思へば、私がやり度くなり、やらずに居れぬ様になつた時やる事であつて、それは私の爲めであつて、決して、重美さんの爲めでも、他の何人の爲めでもあり得るわけがないのである。人が人の爲めになると云ふ事は、只一つ、かう云

ふ関係に於てだけである。例へば、私が私自身の生活を進めて行く、その進め方が、本當に工合がよくて、私の幸福が確實に増大して行く底のものである時に、重美さんなり、他の何人にしても、それを見て、自身の生活をして行く参考にせられる時、私はその人の爲めになれ、その人は私に助けられると云ふ事になるのである。何々の事をして上げたとか、して貰うとか云ふ事が、少しも助けるとか、助けられるとか云ふ事になるものではないのである。

この事をハッキリ知る事は、實に重大な事である。人生の一大事だと私は思つて居る。いろ／＼の迷ひや、悩みは多くこの所が自他共にハッキリしない所から、人生が混雜して來るのである。わかるとか、わからぬとか、悟るとか、何とか云ふ事も、實は、こんな、何でも無い日常の事のわきまへにあるのではないかとさへ、私は思つて居る。

この冊子を拵へるにしても、私は殆ど何もせない。只この一文を書くだけであるが、

これさへ、重美さんが期待する所をば、全く裏切るかも知れぬのである。重美さんは、いつも、私が頼りになる様で、頼りにならず、頼りにならぬ様で、サテ離れられもせぬと、よく云ふが、私は君が求めて居るものを君に與へる氣がないのである。

その点で頼りない人間だ、冷膽な人間だと云はれても、その通りだと答へるより外はない。私は君の爲めに一日も一刻も盡す考はない。それは出來ない事だと云ふ事を知つて居るからである。それは君にばかりではない。誰れに對してもさうなのである。私は常に自身の爲めばかり生活をして居るのである、その代り誰れからも、何もして貰はうとも思はぬ。して貰へるものとも思はぬ。だから不足は云はぬ積りである。

従つて誰れ人との間にも、混雜を起すまいと思つて居る。スーツと筋の立つた生活、水の流れる様な生活、本草の伸びて行く様な生活、私は私の生命を樂んで生きて行く。此間の夜、家内にも話した事だが、私は自身の心中に、不平もなければ、不満もないから、私から出る言葉、私のする行、凡てよい氣持であらうと思ふ。他の人に損害を

興へる事が、餘りあるまいと思ふ。私は何をしてもよいと思ふ。私自身がよいものだから、私はモウ生かされる事に不安はない。私を生かしておく事は、天地の喜びであり、皆んなの邪魔になるまいと思ふと、話した事だが、自惚れだけでなしに、私はさう思へるのだ。

何よりも嬉しいのは、いろ／＼の事に出會つて、心の底にキズが残らず、底から／＼喜びが湧いて来て、何とも云へぬ平安が私を包むのである。平安が生きて居ると云ふ氣がするのだもの、何でこれがわるい事があるものか。

斯の如き幸福に私になれたと云ふ事は、只一つ、先に述べた人に助けられる事も出ず、人を助ける事も出来るものでない。又助け助けられる要もないのだと云ふ事が、ハツキリと知れたからに外ならぬと、私には思へるのだが、重美さん、あんたはどう思ふ。

しかし、私はこの冊子がよく賣れて、あなたが、少し金も入り、仕事もモノになりかけて、喜んでくれ、ばよいがと、それは本當にさう思ふ。マア印刷して出して見る事だ。案外多く賣れるかも知れぬが、反對に餘計賣れぬかも知れない、そんな時はこの私の書いたものでも、よく読んで、皆んなが買つてくれぬとて淋しがらぬがよい。後始末は又何とかなるであらう。

大正十五年三月六日

高橋正雄

斷片語

目次

はしがき	一七
矛盾に即したる調和の世界	一
おかげを受ける(救はれる)とはどうなる事か	五
ありのまゝを内省すること	八
嘘は難しいが正直は容易い	一三
依頼心は信心ではない	一六
愛は溢るゝ	一七
信心の味ひかた	二五
信心の味ひ	二八

慾の生活と愛の生活……………三三三
 道が分れば大いに働く……………三七七
 仕事はどこにでもある……………四一
 落ちつきたいなどは贅澤だ……………四六
 先方の心になつて見ることに……………四八
 人をもてあまさぬ……………五三
 私の必要とする神様は……………五八
 はんどうに幸福になる話……………六〇
 金光教要義……………六五

編輯後記……………一一四
 目次(終)……………

矛盾に即したる調和の世界(隨筆)

かつての我れは運命に反抗せんとしたるかな、今はスナホに信順す、有難しく。運命に反抗せんとしたる時は、よし！それならよし！と、内に復讐の寢刃を呑みつゝ、表面は冷やかに運命に讃辞を捧げた我れであつた。悪魔のうち最も性質の悪いものであつた。其後は感ずるが如く、感ぜざるが如く装はひつゝ、運命に反抗し、別個の立場に對立せんとした。機會は來りぬ、復讐の怨恨に身を任せ、其爲め滅びてもよし、地獄に墜つるも更によしと、運命の前に亂舞した。冷酷なる我れよ、皮肉なる我れよ。斯くて我れは復讐し得たりとした。其れは愚かな事であつた、復讐し得たのは自分自身に對してであつた。自身の小賢しき反抗怨恨の我心が其のあり丈けを發露して、刃の有り丈けを自身に突き刺したに外ならなんだ。其れで運命其物は何ともなる筈はない。否さうなる事、其事が運命なるぞと嚴かに宣言した。汝はそれである丈けを成したのであるか。汝の成し得る所は唯

それだけなるか。其れも皆我が肚の中にての事なるぞと我を包めり。やうやくにして我れは目醒めかけぬ。運命の深さ、大きさを、我れの果敢なさを、醜くさ。其後時は経ぬ。事は動きぬ。されど凡てが皆我れをして漸次に運命の却りて我を慈しみ、深き愛もて、育くめるものなる事を、知らしめる様に流れ動いた。感謝すべきかな。我れは運命の愛子となりぬ。スナホに無理せず信じて仕へ奉らんことを祈る我れとなりぬ。奇しく妙なる運命の仕業よ。涙にぬれて讚美し奉る。

存在の根據に矛盾ありと云ふ、成立の内因に不調和ありといふ、それが現はれて戦はねば生きられぬことゝなる。子の生れる事が親の衰へとなる。生きる事が死ぬる事となる。此の矛盾に我れは得耐へぬか。生に處する事をのみ考へたる時は、此の矛盾は我が計畫を破壊した。

自身の事をのみ謀つた時は、此の不調和は我が計らひを壊した。其れは當然である。事實の全体に涉つて居ないから、半面から壊はれて來るのが當然である。矛盾の全体を採り入れ、不調和の全相を其儘に受け取る事を知つた時に、我が存在は壊はれたが如くにして實は成立して居た。壊はれたのは半面の上に無理に樹てたものが、壊はるべき筈で壊はれたのであつて、成立したのは事實その儘の上に自然に成立したのである。それは我が計らひにあらねば堅剛不壞なるものである。其處には生もあり、死もあり、戦ひもあり、平和もある。然も何れが善きも悪しきも有るのではない。眞個の事は生きるとか死ぬとかの其相にあるに非ずして、其矛盾の間に其儘に不調和を受け取る其相にある。其所に事實の相永遠の意義を有して光る。戦ひも戦ひに非ず。平和も平和にあらず。死も死に非ず。生も生にあらず。皆別のものになつて光る。光よ、あゝ光よ。(大正八、一二、某日)

○ ○
 ありがたく、ねてゐる。ありがたく、あそんでゐる。ありがたく、あくびしてゐる。ありがたく、あぐらかいてゐる。ありがたく、こひしてゐる。ありがたく、うごいてゐる。ありがたく、せうべんしてゐる。ありがたく、なんでもしてゐる。なにをするにも、あり

がたいなかでしてゐる。

それが、さらにすゝむと、なんともなくなる。あたりまへになると、ありがたいのも、なんともなくなる。そこまでゆくと、よいきもちだらう。なんともなくなてゐる。なんともなく、せうべんしてゐる。なんともなく、さけをのんでゐる。イヤ、さけは、さけのあじがなくてはならぬ。ヌク／＼とねてゐる。ヨイきもちで、せうべんしてゐる。オイシクたべてゐる。たいくつして、あくびしてゐる。くつたくして、すはつてゐる。ナントそのまゝで、よいではないか。よいともおもはず、よいではないか。よいや、よいや、ヨイトコサー

②

この一文は、大正十三年三月十一日朝、瀬戸田教會所の控室で、イヤ、仕事に出かけやうと云ふ時、私のノートに記されしものであります。

(編者)

おかげを受けるごはごうなる事か

おかげを受ける、(救はれる)とはせうなる事であらうか、病氣なのが治るのもおかげである。災難を免れるのもおかげである。家族の不和が直るのもおかげである。自分の行が改まるのもおかげである。ところが、身体が健康になつても、その身体をどんなことに使ふべきかといふことが解らなければ、身体が健康になつた丈けでは未だ足りない。金が出て来ても、それだけで、もう善いと云ふ氣は仕ないだらう。家内が仲善くなることも、唯仲が良いいふだけでは物足りない事はないだらうか。すれば何處までになつたら、おかげを受けたといへるのであるか。どうならうと吾々は思ふて居るのであらうか。今のまゝの身体、今のまゝの財産、いまのまゝの家庭の事情、現在のまゝの境遇では、何所がどういけないのであらうか。どんな具合になつたら自分は満足して日々の生活を進めてゆく事が出来るのであらうか。

自分(じぶん)はどんなに成(な)つたら良いのか、これは解(わか)り切(き)つた事(こと)の様(よう)で實(じつ)はさう容(みやす)易(やく)く解(わか)ることではない。併(しか)し、之(これ)が確(た)然(じつ)定(じやう)まつて居(を)らなければ吾(われ)々の生(せい)活(かつ)は方(ほう)針(しん)が立(た)たなくなり、どうやつて行(い)つて良いのか、更(さら)に見(けん)當(たう)が立(た)たぬ譯(わけ)であるが、實(じつ)際(さい)はどうか日(に)々(じつ)々(じつ)やつて居(を)る。そして善(よ)いと思(おも)ふたり、悪(わる)いと思(おも)ふたり、嬉(うれ)しいと思(おも)ふたり、困(こま)つたと思(おも)ふたりして生(せい)活(かつ)をして居(を)る。けれども、もと／＼自分(じぶん)がどうなつたのが本(ほん)當(たう)に善(よ)いのか、其(その)根(こん)本(ぽん)が確(た)かに定(き)まつて居(を)ないのであるから、實(じつ)は自分(じぶん)が良(よ)いと思(おも)ふことも、果(はた)して實(じつ)實(じつ)に善(よ)いのかどうか。悪(わる)いと思(おも)ふことも、果(はた)して實(じつ)實(じつ)に悪(わる)いのかどうか、實(じつ)は良(よ)く解(わか)つて居(を)ないのだと思(おも)ふねばならぬ。實(じつ)際(さい)自分(じぶん)は困(こま)つた事(こと)だと思(おも)ふた事(こと)が、少(すこ)し時(とき)が経(た)つて考(かん)へて見(み)ると大(たい)變(へん)自(じ)分の爲(ため)に良(よ)いことであつたり、其(その)時(とき)は大(たい)變(へん)嬉(うれ)しいと思(おも)ふた事(こと)が元(もと)で、大(たい)變(へん)困(こま)つた事(こと)が出來(で)たりするのは、殆(ほとん)ど毎(まい)日(にち)の様(よう)に經(けい)験(けん)して居(を)る所(ところ)である。或(あ)る事(こと)に就(つ)いて他(た)人(ひと)から非(ひ)難(なん)されて、メチャ／＼に壞(こ)された爲(ため)に、却(か)つて更(さら)に良(よ)い考(かん)を立て直(ただ)す事(こと)が出來(で)る事(こと)もある。又(また)自(じ)自(じ)身(しん)が病(びやう)氣(き)をしたり、身(み)内(うち)に死(し)なれたりした爲(ため)に、今(いま)迄(まで)判(わか)らなんだ人(にん)情(じやう)の眞(まこと)が知(し)れるといふ事(こと)もある。

○ ○

身(しん)が病(びやう)氣(き)をしたり、身(み)内(うち)に死(し)なれたりした爲(ため)に、今(いま)迄(まで)判(わか)らなんだ人(にん)情(じやう)の眞(まこと)が知(し)れるといふ事(こと)もある。

○ ○

その様(よう)な譯(わけ)で、自分(じぶん)がよいか悪(わる)いか思(おも)うてゐることに、少(すこ)しも確(た)かな根(こん)據(きよ)がないと云(い)ふのは、畢(ひつ)竟(じやう)自分(じぶん)はどうか良(よ)いのかと云(い)ふ事(こと)が、確(た)かだ無(な)いからと云(い)はねばならぬ。かう考(かん)へて來(く)ると、其(その)事(こと)が定(き)まらねば吾(われ)々の生(せい)活(かつ)は、手(て)も足(あし)も出(で)なくなる様(よう)であるが、其(その)實(じつ)どうにか其(その)日(ひ)々(じつ)々(じつ)が暮(くら)せて行(い)つてゐる。唯(ただ)そこに少(すこ)しも確(た)かさがなく、落(お)着(ちやう)きがない。おかげを受けるとは、自分(じぶん)の生(せい)活(かつ)に就(つ)いてどうか良(よ)いのか、どうか良(よ)いのか、自分(じぶん)としてやつて行(い)き様(よう)が解(わか)ることだと思(おも)ふ。それは道(みち)が知(し)れると云(い)ふても良(よ)い。道(みち)といふのは、人(にん)生(せい)の道(みち)の事(こと)で、即(すなは)ち人(にん)間(げん)の生(せい)活(かつ)のして行(い)きやうが解(わか)るのである。人(にん)間(げん)の生(せい)活(かつ)は、色(いろ)々(さか)々(さか)の内容(ない)容(よう)をもつて居(を)る。衣(い)食(しょく)住(じゅう)の仕(し)方(かた)から其(その)材(ざい)料(りょう)の需(もと)め方(かた)、人(ひと)との關(かん)係(けい)病(びやう)氣(き)の事(こと)、死(し)ぬ事(こと)など限(かぎ)りなき内(ない)容(よう)をもつてゐるが、それ等(ら)の一(いち)々(じつ)々(じつ)の事(こと)に就(つ)いて、自分(じぶん)としてや

つて行きやうが解る。かういふと何だか處世術のやうにも聞へるが、只普通に所謂世に處してどうにか生活して行けるといふことだけではないので、それだけではどうしても満足することの出来ない感じが、吾々にはある事も事實である。其感じが實は中々大切なものなので、それが満足されなければ、吾々はどうしても落着いた感じを持つて生活をして行くことが出来ない。

おかげを受ける、(救はれる)とは、其處までの事がわかるのでなければならぬので、つまり一面から云へば、自分としてはもう是れで良いと、眞實に云へる迄になることである。併しそれならもうそれで人生の活動が止まつて終ふのかと云へばさうではないので、人生の價値が本當に解つたのだから、益々それを活動させて行く事になるので、其點から云へば最も活きて來るのである。

ありのまゝを内省すること

おかげを受けた、(救はれた)といふことは、自分としては遺憾なきまでの、生活が出来るやうになつたといふことで、其内容は中々吾々にとつて大切なことである。自分の生活を省みて、どうしても其處までのおかげを受けたいものである。それには有の儘に自分の生活を省みることが大切である。日々自分は衣食住の致方に於て、其材料の需め方に於て亦他人に對する關係に於て、どんな感じと、どんなやり方を以てやつてゐるか、又自分は吾が心の中の色々な感じを、活かして行く事に於て、遺憾ないかどうか。自分が現在やつて居る生活を、正直に其儘を觀察して、それで良いかどうかを考へて見なければならぬ。

○ ○

今まで自分がやつて來た生活を、ありのまゝに反省して見ると、そこには、根本に不純なものがあり、不合理なものがあり、その爲めに、自分の生活にも、周囲との關係にも、色々な相濟せぬ問題を起してゐることが解るであらう。それも人間同志だから仕方がない、と、押巻くればそれまでだが、さう仕切れぬ心持ちが、自分の心の中にあることも、誤魔

化すことの出来ぬ事實である。其心の聲に正直に聞けば、何となく自己中心の生活を募る事が、相濟まぬ心持ちがして、其儘につける事が出来なくなる。自分の生活の中から、自分を改めなければ、承知せないものが現はれて来るので、其心持は、絶えず新しい生活の仕方を求めずに居れないのである。

○ ○ ○
救はれたいと思ふものにつけて、最も心を引く問題は救ひの事實、救ひの内容、即ち救はれるとは何んなになる事かと云ふこと、其救は何んなにして得られるものかと云ふ事である。人間は誰れでも救はれ度くないものは有るまい。さう云ふ自覺の有るものと無いものとは有るであらうが、人々が色々の營みで困つてゐる事、色々の悩みを持つて居る事は事實に於て、皆んなが救はれ度がつてゐる、少なくとも救はれねばならぬものである事を、語つて居るものではあるまいか。

一人の人が救はれたと云ふ事實がある以上は、それは實に萬人の生活にとつて、最も刺戟的の事柄であらねばならぬ。萬人の参考となり、力となり、光となることである。さて其救の内容はどんなものであるか。

○ ○ ○
それには相當の経験を重ねる必要がある。自分で生計をも立て、見、色々な人と色々な交渉をも重ねて觀た上で、其間に動く自分を觀て行き、又他の人の生活の仕方をも、觀たり聞いたりして参考にする必要がある。それ故此事が出来るのは、生活を忠實にして行くものでも、三十歳から四十歳前後までの生活をした上でなければならぬ。古來、有名無名の道に入つた人々は、たいてい、さういふ經路をとつて居るやうである。

道を得た人々は、自己の生活を忠實に進めて行きつゝある間に、其の生活の中に漸次に現はれて來た或モノがあつた。其のアルモノがどんなものであるか。それが明かに解れば、それで救ひの内容が解るのであるが、實はそれは解るものには解り、解らぬものには解らぬとでも云はなければならぬ。口や筆では良い具合に描き出すことが出来ないものである。

けれども、其アルモノが顯はれて來ると、其人の生活がいろ／＼な點に於て不思議に變つて來る。その變つて行く有様は、外形上に現はれるものであるから、其變る有様を見て、アルモノの何んなものであるかと云ふ事を、想像する事は出來ないこともない。

○ ○

漸次、其のアルモノが現はれて來て、心持ちが變り、行ひが變り、生活振りも變つて來る。それは心あるものゝ、目に觸れ心に或る感じを與へる。それがそれらの人々にどつて、懐しいものであり、尊いものであり、難有いものであり、漸次今迄の生活氣分とは、違つた生活氣分に進んで行くので、我乍ら其方へ惹かれ、生活の前途に新生面が開け、光明が輝き、希望に満ちて、生き活きとして來る様になるので、自然其人を慕ふて、其許に集まり其話を承はり其生活を觀、其力に觸れることを求める様にもなつて來るのである。

嘘は難しいが正直は容易い

嘘を言ふのが容易いか、正直に行く方が容易いかと云ふと、正直に行く方が容易い。嘘を云ふのは難しい。嘘を言ふには智慧が要る。記憶が良うなければならぬ。せうしてと云ふに、直ぐバレる様では嘘にならぬから智慧が要る。嘘を云ふて居るとウツカリ今度眞實の事を云ふたら以前の嘘がバレる。他人は以前の事を一々覚えて居るから、嘘を云ふて渡らうとするには、一々自分も前の嘘を覚えて居らねばならぬ。以前に云ふた嘘偽と合はせねばならぬから、同じ事を人間は云ふものでないから、逢ふ度んびに前に云ふた事を幾つも記憶えて居らなければならぬ。何處から尻尾が出るか分らぬ、さう云ふ事になると嘘と云ふものは非常に骨が折れる。當り前に、ありのまゝで渡るのは、智慧も要りはしない。見た事を見たと言ひ、見ないことを見ないといふ。聞いたことを聞いたと云ひ、聞かぬことは聞かぬといふ。思ふたことを思ふたと云ひ、思はぬ事は思はぬと云ふ。有ることは有

ると云ひ、無いことはないといふ。如何なる事も正直銘、其のまゝでやつて行けば良い。嘘を覚えて居て、辻妻を合はせ様とする様な苦勞は要らざる苦勞で、無駄なことである。さう云ふ人は要らざることに心や身体を使ふ。寝るにもスヤ／＼よう寝ぬ。本氣によう寝ぬ。何を喰べても、眞に美味くよう喰べぬと云ふことになる。所が胸に秘密のない人は、今やる事に全精力を注ぐことが出来る。今の今に、一心不乱に、心でも体でも、使ふて行くことが出来る。他人が以前の事をどう云ふだらう、どう思ふて居るだらうなと云ふ心配は少しも要らぬ。さう云ふ風になつて來ると、これ程樂なことはない。

○ ○

信心の話といふものは、少しも曲つた事のない、依怙最負のないものである。天に貫き地に貫き、誰れにでも通用し、何所でも通用する。何所へ持つて行つても障りのないものである。あの人が此所に居るから言へぬとか、片ツ方をひいて片ツ方を陥れると云ふ様な事は、續いて行くものではない。さう云ふ様な事で、世の中の治りがついて行くものぢや

ない。なんば聽いて見ても一つも無理のない、少しも道理に適はぬ事のない、素直な道である。スラ／＼とした事である。

これが非常に難しい事の様に思へたり、損のやうに思へたりするのは、自身に得手勝手な心があるから、其得手勝手な心がさう思ふのである。得手勝手になり氣儘になると、信心の話は聽きたくない。そんな事が出来るものかと云ふやうな氣がする。所が漸次自分が行詰つて來ると、何故行詰るかど云ふ事を考へねばならぬ様になる。それを考へて見ると自分の手許に、こたはりがあつたり、曲つた事があるから行詰る。さうすると、どうしても信心に基かなければ解決はせぬ。信心に基いて見ると云ふと、成程容易いと云ふ事になつて、始めて信心の話が聽きたくなる。さうなるともう占めたものだ。本當に味が分りかけて來た証據なのだ。さう云ふ様に何事に就ても、夫婦關係に就ても、經濟關係に就ても、仕事に就ても、さういふ風になつて來て、信心でやれば何處でも通用する。安心の道が開けて來る事になる。

依頼心は信心ではない

一六

信心と云ふものに就て、従來の考へ方はどうであつたか。何か自分の都合を良くして貰ふ事だと云ふのであつては、それは依頼心であつて、己の心から湧き出して来る信心ではないのである。眞正の教へと云ふものは決して我々の依頼心を増長させ、我々の頼りになるものを拵へて下さるのではない。依頼心を増長させるのでは、本當に人を助ける事にはならない。各自に信心と云ふものが、肚の中に宿つて……宿るといふのも可笑しな云ひ方だが……そうして己れの處分が己でつく様になつて來、各々がさう云ふ信心生活の出来る人間になつて來なければ、本當に自分が確かりした人間になる事が出来ない。本當に信心生活が出来るやうにならなければならない。さう云ふ事になつて來ましたら、一軒の家の中にさう云ふ人が出來たら、どれ程強くなつて來るやら分らん。それだけの力と云ふものが、我々の色々な問題に向つても、大きな影響を及ぼして行くことが出来るのである。だ

から信心と云ふものは、自分自身の身の上に引取つて、味うて「俺はどうだらうか、俺はどうだらうか。」と身の上に引き取つて味うて行くのでなければ、本當の信心にはなつて來ない。さうして自分と云ふもの、フラ／＼してゐるのは、「それは俺が信心に明かでないからぢや。」と云ふ事になつて、話を聞く度に自分の心に確かり味うて、さうして自分の心の中に溶け込んで、受け入れる様にしなければならぬ。さうすると一ぺん話を聞き、一ぺんお参りする度毎に。信心の友達に會ふ度毎に、自分の心の中に信心の力が生きて來る。さうして確かりと己れと云ふもの、肚の中から湧き出て來る心持にならなければならない。さういふ味ひ方をする。さうして人の行ひを観ても、一つの本を讀んでも『成程ほんにさうかいなあ、さうかいなあ。』と自分の心の中に味ふ。さうしてそいつが生きて動くと言ふ様な信心の仕振りにならなければ、本當に信ずるといふ事にならん。

愛は溢るゝ

一七

自分の願ひを省みると、それは愛である。愛を求めてゐるのである。求めると云ふて人から愛せられる事を求めるばかりではない。自ら愛したいのである。人から愛せられるのも、自ら愛するのも、愛を味はふと云ふ點に於て、同じことである。人から愛せられ度いと思ふのも、愛を味ひ度いからである。自ら愛したいと思ふのも、愛を味ひ度いからである。愛を味ひたいのが自分の願ひである。

それは人から愛せられることによりても味ひ度く、自ら愛することによりても味ひ度いのである。どこまでも、純真無垢なる愛を味ひ度い。愛に生き度い。これが衷心の願ひである。

我子を愛するのは、自身の愛を現はす對手、云ひ換へれば、自身の愛を引き出して呉れるものであるから、我子が良いものなのではあるまいか。本當に良いのは、我子を對手として、そこに現はれる我が、愛が良いのではあるまいか。

それなら、何故他人の子よりも、我子が可愛いのか。それは、我子には絶えず愛をそゝいで、其愛が其處に限りなく現はれてゐるから、それがよいのである。つまり、自身がこれ迄、そこに働かした愛を喜んでゐるのである。それ故他所の子でも、それに對して愛をそそいでゐれば、漸次良いものになつて来る。子供ばかりではない、植木でも、猫でも、道具でも、皆良いものになつて来る。

一度旅に行つた所が、何故なつかしいか。其處で自分が現はした愛が、その山にも、野邊にも、人にも残つてゐる。それが懐かしいのである。だから、其のあたりで、深い清い愛を現はした所程、何時までも懐かしい。巡禮の跡などが。淨いものとして思ひ出されるのは、其爲めであると思はれる。

なにもものに對しても、淨い愛をそゝげ。しだいにそれが、良いものになるであらう。こちらの愛がそこに移つて、美はしいものと變るであらう。

嫌ひなものがあるのは何故か。其ものとの間に、愛が味はゝれないからである。先方も愛を現はさず、こちら愛を現はさず、愛の味ひが、其ものとの間に少しも味はれぬ時に、

キライでならぬのである。先方は愛して呉れても、こちらがそれを愛する事が出来ぬ時は、ヤハリ嫌ひである。先方の愛を受け入れることが出来る様になれば、其時そのものどの間に、愛を味ふことが始まるから、好になる。こちらから愛する事が出来る様になれば、もうスキでならぬ様になる。先方は嫌つてゐても、こちらが愛を感じる事が出来れば、こちらは好きになる。それは、そこに何時でも愛を味ひ得るからである。かくして愛を味ふといふ事が、結局自身の願ひであることが知れる。

○ ○ ○

喧嘩をするもの同志は、愛を求め合つてゐるのである。自ら先方に對して、愛を働かせば、いつでも愛を味ひ得るのに、それに氣づかずに、向ふから愛せられて、愛を味ひ度いどのみ思ひ、先方が其の註文に應じて呉れぬ故に、不足を訴へ、甚しきは、それを口にも、行にも現はすに至るのである。たとひ一方がさうして、相手の一方が、こちらから愛さへすれば、自身に愛が味へて、自身の深い目的が達するといふ事を知つて、求められるま

ゝに、愛して行くならば、そこに喧嘩は起らない。求める方は、與へられて愛を味ふて喜び、與へる方は、與へる事によつて、愛を現はして愛を味ふ。それゆえ喧嘩になりやうがない。喧嘩になる時は、一方が愛を求めるのに、又一方も與へる事によりて、愛を現はすことを知らず、それを拒絶し、場合によりては、こちらも愛を求めんとする時に、いろ／＼の姿で喧嘩となる。愛は受ける事によつて味はふのも、現はす事により、與へることによつて味ふのも、同じ事であると云ふことに氣がつけば、如何なる場合にも、愛に飢えることではない。愛を常に味ひ得るに至つて、人間は根本の願が遂げられ、満足を感じる。

○ ○ ○

愛するものと別れるのが、何故苦しいか。何故淋しいか。其二人の間には、愛を受けたり、與へたりする道が、よく開けてゐて、深く／＼お互に愛を味ふて居るのに、それが別れると、それを味ふ機會が少なくなるから、愛に飢へる爲めに、淋しくなり、ツラク感ずるのである。愛する者同志は、別に何にもしないで、只一所に居り、顔を見合すだけで、

深い愛を互に交換することが出来る。それ位容易く、深い愛を味へる様になつて居るのに、別れると、それが出来なくなる。そして愛を交換するのに、大變手數のかゝる人々の間にのみ居なければならぬので、淋しくツライのである。誰れとの間にも愛を交換する事、どこまでも愛を味ふことが出来るやうになつたものは、淋しがらない。愛する人と別れても、どこへ行つても、愛を味ふことを知つてゐる。先方から愛してくれる事は、なか／＼難しくいかも知れぬが、こちらから愛を現はすことは、どこでも、又誰れにでも出来る。愛を求めてゐない人はないのだから、それを仕事にする者は、到る所で愛を現はすことが出来る。愛を現はせば、愛を深く味ふことが出来る。かくして愛することを知らぬものは、どこでも賑やかになる道を知つて居る。

愛を求めて止まぬ心は、限りなく淋しい。淋しい故に愛を現はしもし、又他の愛を受けもするのである。淋しいことを知らないものは、愛を知ることが出来ない。限りなく淋しく、限りなく愛を味ひ度い。これが自身の姿のやうに思はれる。

愛する者と別れるのは淋しい。限りなく淋しい。けれども、別れねばならぬものならば、どうしても別れねばならぬ。別れぬワケに行かぬ。別れて淋しい心を、更に愛を自ら現はし、又他の愛を受ける事によつて、賑やかにして行きたい。受ける方は、期待することは出来ない。與へられ、ば恵みとして感謝するのみである。

○ ○

愛の本質は何であらうか。自ら眞實に愛せられてゐる自覺ある者は、愛の本質を知ることが出来る。眞實に愛せられてゐる自覺とは、自身が眞實に幸福にせられてゐる事の感じである。自身が味ひ得てゐる幸福を、他にも願たんとするのが愛である。他をして自身と同じ幸福に生きさせ度いと思ふのが愛である。自身が得て居る幸福の自覺丈しか、他に味はせる事は出来ない。自身に不足ある者は、他を愛することは出来ぬ。愛とは溢るゝ働きである。自身の幸福が溢れて、他に及ばずに居れぬ働である。自ら幸福に不足を感じて居る者は、他を愛することは出来ない。先づ自ら不足なき迄に、愛を受け入れねばな

らぬ。愛せられねばならぬ。愛せられて愛に満ち、愛の味ひを充分に知らねば、他を愛する事は出来ない。自ら愛を知らざるものは、他を愛することは出来ぬ。自ら省みて、淨く豊かなる愛に溢れて居る事を感ずる者は、他を愛することをよく知つて居る。愛には、眼があり手がある。如何にせば愛の仕事、他の中に、成し得るかをよく知つて居る。又對手が何を求めて居るかを、良く知つて居る。そして、それを仕遂げる道を知つて居て、自ら手を下して成し遂げる。

愛は決して盲目ではない。盲目なのは、愛の名を潜してゐて、其實は欲である。欲は盲目にして、利己的のみに流れ、自他を傷つけ亡ぼすものである。愛は自身の中に、智慧の光を持つてゐて、いかに自己を現はすべきかを、細やかに知つて居て、決して誤らない。時に興へ、時に奪ひ、時に働き、時に止め、自在の出所進退して、對手をして、愛に溢れしめねば止まぬ。遂に人はどうなれば、本當の幸福に達するかもよく知つて居て、而も對手の今の立場が、それからどの位遠ざかつて居るかをも、よく知り、如何にせば、漸次に、

又直ちに、眞實の幸福に導き得るかをも、よく知つて居る。そしてそれを絶へず實施する。愛程賢いものはない。愛程忠實に働くものはない。

どうしたら善いか判らぬと云ふのは、愛なき爲めである。愛は決して迷はない。迷ふても構はない。常に自身の働きをして。自身の目的を達する道を知つてゐるから、迷も迷と思はない。愛は何時でも損をしない。損をしても、そこで自身の働を現はして、最も大事なことを仕遂げることを知つて居るから、損が損でないことになる。愛は賞めても讚めても、ほめきれない。筆や口で現はすのもどかしい。心でも口でも筆でも身体でも、生活でも、凡てを以て現はしても、現はしきれない。愛は溢るゝものである。

信心の味ひ方

信心といふものは、自分で味はなければならぬ事であつて、味は、なければ解らない。信心はお話を聞くのが、大切な事であるけれども、其話と云ふものゝ中から味はふて、自

分の心でそれを受け取らなければならぬ。唯お話が解つて、良いお話しやつた、どうもお話を聞いてスウツとした、縛れが解けた様など云ふ丈けぢやあ、其良さ加減は未だ本當でない。さうして縛れが解けた様な、スツとした様な、難有い氣持がしたといふ其時に、さうした其正体を捉へて味は、なければならぬ。さうして他人の話を聞き、さう云ふ風になれると云ふ事の極意、——其のコツを自分が押へて、自分が何時でもさう云ふ様に、縛れの解ける人間にならなければならぬ。自分自身で、賑かな心になる事が出来る人間にならなければならぬ。先方の人が腹立や憎しみを有つて來ても、こちらに信心と云ふものが無い時には、此方も憎みの心が起る。けれども此方に信心があると、先方から憎み心を仕向けられても、それを溶かして終ふて却つて、此方の信心を先方に及ぼして行つて、信心にならせるだけの働きをする事が出来る様になる。先方が心配をする、此方も心配をする、と云ふ様に心と云ふものは傳染するものである。他人が心配をする、此方も心配をする。他が腹を立てると此方も腹が立つ。赤痢やコレラの傳染よりも、もつと早いもので

ある。此の心が傳染すると云ふ事實は、實に頼もしい事であつて、腹立や心配が傳染するばかりでなく、難有い心も傳染する。有難い心が此方に起れば、其難有い難有みが、此方から先に先方へ傳染するのである。先方の腹立や心配が此方に傳染するよりも、此方の難有い心が先方へ先に傳はれば、此方が腹を立てさせられるヒマがなく、先方の方が變つて來る。さう云ふ様な人間にならなければ、信心生活者とは云へない。信心生活者(信者)と云ふのは、信心といふものが自分の生活となつて、さういふ働きをする様になつて來る事である。「ヨシ、世の中の人皆心配するなら心配をせよ、自分一人が其心配を溶かして見せる」。かういふ様になつて來るのである。皆んなが腹を立て、居るならば、俺一人の信心の心持ちで、皆んなの腹立ちを溶かして終ふ、と云ふ事になつて來る。それが「信心」と云ふんですネ。それだけ確かりした心が、己れに出來てくるんですネ。さうした事にならずして貰ふことが、それが信心生活と云ふ事になるんですネエ。

信心の味ひ

二八

信心の心持はどんなものであるか、火の燃え移る様なものと云ふが、その火はどんなものか。之を言葉で申しますればハッキリしません。ほんに難有いものであるなと思へる時、それが信心の火が燃え移つた時である。唯信心の道理が解つた丈ではなく、勿体ない、難有い心持がしたら、火が燃え移つたので、淋しい心が賑かになり、弱いものが大丈夫になり、狭いものが廣々とした所に出て、ダン／＼心の中が伸びて行き、自身の改良をして行くのであります。これではどうもならぬといふものがシンになつて、自身を動かして居つたのが、間違ふて居つた。さういふ様なものでは無かつたと氣がつき、難有い勿体ないと思ひ、これまでの我儘が濟まぬと改まり、懺悔が起ると、親に對しても、子に對しても、皆さんに對しても、濟まなんだと、肚の中からそんな氣持がして仕方がない。そんなにせいでも良い、贅澤をせよと云はれても、出來ない。そんなに眞心を出さんでも良い、と云はれてもせずには居れぬ。私が幸福ですから賞められずとも。私自身が、さうさせて

下されといふ事になると、信心が生き販つて來たのである。他人から賞められたり。感心されたりするのはどうでもよい。自身の中から、かう云ふ具合にしたいと云ふ心が、湧き起つて來るので、恰度妊娠と同じ様に、一度種が入れば、次第に大きくなる様に、信心も必ず成長して行くのであります。我ながら考へて眞だと思へば、人が見て居らなくてもよい事が仕度うなる。自身は善いとも悪いとも分らずにして居るのに、それを人が感心する様な事が出來て、今までの様に、他人と自分を、別々に思へぬ様になつて來るのであります。そこで自分丈樂をし、得をしやうとせず、自分が出來る丈よい事を、手にも体にも心にも、さしてもらはねばならぬと云ふことになる。それが信心の火が燃え移つたといふのである。さうなると、天地に續いて居る難有いものが、心に宿つてくれた氣がします。今までは一人ばつちである様に思へたものが、天地に貫いた大きなものが得られた心持がする。教祖様は、神徳の中に生かされてありと云はれ、さう云ふいろ／＼の心持を教へられて、神は我本体の大祖ぞ、信心は親に孝行するも同じこと。生きても死んでも天と地とは我住家と

二九

思へよ。とも示されてありますが、我住家とか、我家といふものは良いもので、私は時々金光町から、郷里の生れた家へ歸る事があります。その時はなんとも云へぬ落付いた氣持がして、山も川も、木も私に親しみがある。向ふの心持が分るやうな氣がする。部屋も柱も天井も、その心持が分つて居り、こちらの事も分つて呉れて居る様な氣がする。其中で母が御馳走をして呉れる、母の心がよく分つて居る。それで母の評に歸ると心が落付くのであります。

それが信心になると、天地全体がさういふ親しみを現はし、皆んなと心が通ふから、遠慮も氣兼ねもなく、落ち付くことが出来るのである。お互の間でも氣心が知れて、一から十まで分つて居る間柄であると、遠慮會釋なく、云ふべき事を云ひ、お互の肚の底まで許し合ふ事が出来、信じきる事が出来、互にとけ合ふことが出来る。『わしがお前かお前がわしか、わしはお前のわしぢやもの』と。唄にあるやうに、どちらがどちらか分らぬ様にとけ合ふのである。其處までになる事が信心信念である。さうなつて居らぬと、絶えず、ゴタ／＼

が起るのであつて、それが一つになり、不安が除れる事は、信心より他にはないのである。其のとけ合ふ事が、人生にとつて一番幸福である。

○ ○

淋しいと云ふのは、誰れども、心が合ははやうな氣がするから、淋しいので、合はぬ様な氣がするのは、自身の心の中に、どこか得手勝手な所があるから、合はぬのである。我々心の中に、得手勝手な心持がなくなつたら、誰れとでも、俺の心が合ふがなア、と云ふ氣持ちがして来る。それが、私は信心と云ふものだと思ふ。自分の心が信心になれば、どんな人にも、合ふことが出来るでせう。此の世の人は、いつかは別れなければならぬ。二十年後に別れるか、三十年後に別れるか、生別、死別、何れにしても、必ず別れなければならぬ。別れても、自分の心の道が、眞直ぐであつたら、幽界の靈ども逢へると思ふ。此の世の者と、あの世の者と、合うといふ事は、信心より外にない。先生が來て、祝詞をあげて下さつたり、御祓をして下さつたり、禱つたりするのは、眞直ぐな道を行く様にと

いふ事を、祈つて呉れられるので、それが幽界にも、顯界にも、通ずるといふのは、誠があるからである。先生に誠があつても。聴く方に、誠がなかつたら、通じはしない。眞心がなかつたら、同じ家の、家根の下に住んで居つても、何年経つても通じはせぬ、けれども、誠なら、何百里離れて居つても、人の心は皆わかる。あの人は、かう云ふ心ぢやといふ事が、チャンと知れる。淋しいといふのは、人の心が知れぬから淋しいのである。淋しさを逃れやうとするならば、自分の眞心を以て生きる様にし、得手勝手な事を、せぬ様にするがよい。病氣で臥せつてゐる人など、こんな体の悪い者に、眞心が出来るかと、思はれるかも知れぬが、体が強く、健康でなければ、眞心が働かぬといふ事であつてはならぬ。弱けりや、弱くても、眞心にはなれる。例へば、介抱して下さる方に對して、難有うございますと、なるだけ、手数を掛けぬ様にと云ふ心になられたら良いでせう。寢て居つても、家の人や、友達や、縁ある人々が、どうぞ達者な様に、どうか心から、賑かに暮される様にと、祈ることは出来るでせう。自由のきかぬ体なら、そのまゝの体で、出来る丈けの事をしたらよい。我体を大事にするに云ふことも眞である。皆んなが其人の体を、大事に思ふのだから、出来るだけ、自分の体を大事にすることが眞心である。それが其人の仕事である。

慾の生活と愛の生活

慾の生活は足らぬものがある。金が足らぬ、地位、名譽が足らぬ。それ故それを充たさうとする。慾の生活は不幸な生活である。消極であり、破壊である。即ち慾の活動は他人を傷つけ、穴をあけても自分を充たさうとする。それが何故活動であるか。それを積極的となせ云ふ事が出来るか。慾を離れたら活動がなくなると云ふが、一度も慾を離れた事がなくて解る譯がない。慾を離れるのは親神の恵が解り、間違つてゐた自分が、許される事を悟らせて貰ふことである。

愛の生活とは、眞の道が自分に解り、親神の愛が自身の中に受取ることが出来て、それ

が活動することになる。愛があふれて出る活動である。即ち積極であり建設である。創造である。物質の上にも心持ちの上にも良いものを殖やして行く。敵がなくなる。皆んなを難有う思へる。どんな人でも持て餘さぬ。もの事にムダをせぬ。贅澤や我儘とせんでもよい。自身の中から愛が湧き起るから、心細くない。賑かで真に幸福な生活である。人間は其人の喜ぶ所に依つて三つに別けて見ることが出来る。

下等、消費を喜ぶ。(享樂の人)よいものをへらす……(不幸な人)

世の中の良いもの——物質上には贅澤して。精神上には腹立ちや心配して——を減らして樂しむ。それを喜ぶ。こんな人が一人あると、其人一人の生活の爲め、多くの人が下働きをせねばならぬ。迷惑である。此人は他から。ものを集めて來る事ばかり考へてゐる。物が減ると心細くなる。無くてはようやつて行かぬ。

中等、所有を喜ぶ。(消極的)もつてゐることをよろこぶ。金銭や物品、肩書や智慧腕前等を有つてゐる事をよろこぶといふだけである。

いくら集めても、産み出すことをせぬ。右の物を左に、左のものを右に、移轉するのみで殖やさぬ。これでは世の中が豊かにならぬ。賑かにならぬ。良くならぬ。上等、創造を喜ぶ。(積極的)よいものをふやす……(幸福な人)

しごとがすき。ムダやせいたくせず。ひとにしんせつな。

世の中の良いもの——物質上には産業によつて。精神上には親切(愛)によつて——を殖やす事をよろこぶ。眞實幸福な人で、行ひや言葉により。口、手、足、体全体から愛が現はれ、湧き出るのである。

考へて見れば、其人々の生活状態はすぐ分る。どうしても生活の基調を變へねば、良い氣持ちにはなる事が出来ぬ。信心は心持ちだけではだめだ。信仰……信心は、根底から救はれるのである。自分の方へ一切取込む生活であつたものが、自分の方から溢れて出ることになる。我情我慾を離れると云ふ事は、何を捨てるでもない、人生に對する感じが變ると云ふ事である。自分は無限に愛されてゐるのだ、と云ふことが肚の底から思へる様に

なるのである。それが信心である。

改りの出来た（救はれた）一信者の手紙に次の様な事があつた

心の底から何かしら強い力が出来、
（これは力である）

心が賑やかになつたやうで、
（これは愛である）

行き詰つて居た心に、進むべき道を與へられた。（これは光である）

この力、愛、光は人生になくてならぬものである。このものさへ本當に得られさへすれば、これ程幸福はない。親神の愛が、自分に受け取れ、自分のものになつた。それを信といふのである。自分が神に恵まれて、神と一つであると解つたら、自分は満されて、不足、不満の穴が埋まり、不平不足がなくなり、これからは愛の活動をする様になる。何でも手傳ひ、凡ゆる事をする内に、愛が現はれて来る。愛の活動が自己より家庭に及ぼし、家庭から社會に及んで来るより外なくなる。商人は商賣が愛の活動の舞台である。言を云ふのも皆愛であることとなる。救はれた姿が信であり、それが救ふ力となる。故に自身が幸福

であると同時に人の幸福である。農業の人は農業しながら、よい事をして行けば、それが直ぐに布教である。何をしてゐても全じことである。（大正一三、一月）

道がわかれば大いに働く

時々私共を訪問して来て、宅の息子が道樂をしてどうもならんから、と相談せられる親達があります。そういふ時に私は其親達に、

「ぶら／＼したり、金を使ふたりして居る人は、嘸樂しいことだらうと思はれる様ですが、私は決してさうではないと思ひます。あれは道樂をしてゐるのではなくて、煩悶といふ事をして居るのであります。それに引換へ、貴方がたは毎日面白く仕事をして居るのであるから、實際は道樂をしてゐる様なものであります。本當に同情すると云ふならば、息子さんの方を同情したいと思ひます。」と申し上げますと、親達は妙な顔付をして私を眺めて居ります。そして

「どうぞ當人を叱つてくれ。」と云はれますが、私には苦しんで居る人を、どうしても叱る氣になれませぬ。それよりも、煩悶して苦しんで居る者の心持をよく察し度いと思ふ。

「君は朝起きても、掃除も手につかぬ位に煩悶してゐるのだらう。人に打明ける事の出来な程、苦しんで居るのであらう。」とかう思ひながら、ザツと非難されて居る人を見て居ると、寧ろ叱らなければならぬ人は、其周囲の人である。何となれば、健全な周囲の人々が、本人に對する觀方を、全然過つて轉倒して考へて居るからである。即ち病人を病人として取扱はずに、大抵は其者を叩きつける様に叱つて、健全な人と同じ様に取扱はうとして居るのであります。仮令どんな悪い者にでも、不良の折紙を付けらるべきでないのを、惡いゝと攻め立て、實際に悪くして居る事が多い。自分は立派であると、何れ程自任して居ても、腹を立てたり、怒つたりして居るのは、一時的に不良な状態になつたと同じ事で、一時間か二時間か、その間だけ不良になつて、我身が我心の持つて行き様が分らぬ様になつたので、つまり道が分らなくなつたのである。……教は吾等に道を分らせて呉れる

もので、それを先覺者が教へて呉れたのである。先覺者は何を覺つたかど云ふと、即ち道を覺つたので、其爲に其人の問題が解決したのである。そして自己の經驗を語つたものが教である。自分に解つた事を云ふのであるから、之を聞く方でも分らせられる。そこで、我々に示して呉れた道の解つた事を珍重するのである。茲に於て教祖とか先覺者の教を聞かざるを得ぬ事になり、其の方へ耳を傾け、接近して行き度くなるのである。か様に自身、道を求め、それを求め得られた時が、救はれた（おかげを受けた）と云ふ事である。其救はれた嬉しい状態、安心の状態を續け、其道を歩いて行く事が、最もよき生活の状態であります。

今までは迷ふてゐるから足が伸びなかつたのが、道が分つたら歩いて行きます。道が明かになると、潔よい精神に充たされて屈托をしなくなり、幸福な境涯が生れて来るのである。さうなると、慌て、ならん時はザツとして居るが、急がねばならぬ時は、急ぎもするど云ふ様に、度胸が据つて来て、そこに確かな生活の道が、日に開けて参ります。そ

れが眞實の生活であります。

そうならされた人には、生活に無駄がない。そしてどういふ事でも、悪いと云ふことがなくなり、有難くない事は一つもない、皆有難い事になつて来る。其人が救はれた人である。故に救はれた人は、自然世に立つて大いに働く様になるもので、救はれない人、即ち道の解らぬ人は、煩悶してゐるので、煩悶に忙しく、どうしても大いに働くことが出来ません。煩悶の苦惱から救はれて、楽しい幸福なことにならうと思へば、どうしても、正しい眞の道を得て、それに基づいた働きをして行くことにならねばならぬ。そういう生活を始めるより外はない。

救はれたるものゝ姿

一、心　みんなを、ありがたくおもふやう

一、身　わがまゝ、せいたくせぬやう

一、仕事　なんでも、いさぎよく、させてもらうやう

仕事はごこにでもある

行詰るゝといふのは、間違つた道を行つて居るからである。何故自分は先が行けぬ様になつたか、今迄自分の歩いて來た道を調べて見たら、キット間違ふた道を歩いて來たから、行詰つたのだと云ふ事が判るでありませう。間違つた道を歩き續けたら、何處に行くか判らぬ。そこで、間違つた道は、行詰る様にして呉れる。それが神の恵みであります。吾々が間違つた道を通つたら、人も批難して呉れる。それが良いのである。行詰るのは、何處か自分が遠くて居る爲めだと氣づいて引返す。其引返す道が大切である。恰度ガラス窓に蠅がとまつて其處から出やうと焦つて居る様なものであつて、向ふが見へて居るから、向うに行けると思ひ、藻掻いて居るのですが、遂々疲れ果て、倒れて終ふ。其ガラス窓の蠅が、それを後に引返して見れば廣い、一寸横に寄つたら開いた所がある。眞個の

道、眞の道はそんなものである。行く道に無理の無い以上、行詰る事はない。眞の道が行詰るものなれば、さう云ふ世の中は、非常に間違つた世の中であるから、そんな所に住む必要がない。併し眞の道はさういふ間違つたものでない。そこで此信念……自分と自分の心の眞中、眞つ直ぐな道を通れば良いのであります。

一昨年(大正十三年)滿鮮旅行の歸途六月三十日でしたが、釜山でお話せよとの事で、私はその時申した。「何んぞ良い事はないか〜。」と就職難や、不景氣で困つて居るといふ事であるが、其實失職者は仕事を探して居るのではない。お金を探して居るのである。仕事はそんなに探さいでも何處にでもある。金はいくら探しても、皆んな足らん〜と云ふて居るのだから行き當らぬ。金を探して居る人は、仕事はあつても直に手を出さぬ。そして仕事がない〜と云ふのです。眞に仕事をする氣になつたら、仕事はいくらでもある。どこにでも仕事は澤山ある。それにそんな仕事をしたつて、金が儲らぬと云ふのは、金を探してゐる証據である。一生懸命仕事をして居る者が、喰はずに居つたり、着ずに居ると云

ふなれば、私は自分が喰つて居る限り、其人と一緒に喰ひ、自分が着て居る以上、其人と一緒に着る積りです。日本の國が、仕事をして居る者が喰へなんだり、着られなだりする國でありましたら、其時私は一大決心をする必要があると思ふ。併し、さういふ不道理事があるものでない。それを私は信じます。其点に於て天地を信じます。さう云ふ大道は行詰る事はない。かう云ふ意味の事を、其時釜山で話をしたのであります。所が翌朝船で歸らうとすると、一人の婦人が會ひたいと云ふて訪ねて來られた。

「何か御用ですか。」實は私は、主人と子供と一家を擧げて、四ヶ月程前に内地から、此地へ參りました。此地へ來たら何ぞよい事は無いかと、色々仕事を探しましたが、どうも良い事はありません。毎日夫婦共不安で、仕様がなかつたのでありすが、昨晚のお話を承つて大變心強く思ひました。今朝主人が、どうぞお前代りに禮を言つて來て呉れ、と云ひますから參りました。と云ふ事でありました。

そこで私は「歸られたら、御主人にさう言つて下さい。私は昨晚來て、今日は十一時に

發ちます。この十時間足らずの間ですが、それでも仕事の二つや三つは見つけて居ります。する氣になれば何でもやれます。今日から一つ改まつた考で仕事を探して下さい。若し仕事をしても、喰はれなかつたら、私の方へ何時でも言ふて来て下さい。かう言うて別れましたが、歸りまして暫くすると、圖書館に勤めんかといふお蔭を蒙りました、と云ふ手紙が來ました。他に事情があつて、それには出られなんぞ様ですが、私は實に人間と云ふものは、有難いものだと思ひます。

俺は間違ふて居つたと云ふ精神が起きると、誰れが見て居るものか、あの人に此の仕事をして貰はうか、と云ふ事になつて來るもの、様です。さうでなくて、自分が得をしやうくと考へて居るものは、何處かにそれが出て居ります。顔色にチャンと現はれて居ります。自分は今まで違ふて居つたと云ふ事に氣がつくと、あの人に、此仕事をして貰はうと云ふ事になる。それは其人の態度全体の上に、それが現はれるものと見えます。それ以來、此の方は、色々な辛苦艱難を経て、今日に至つて居られますが、それでも信心と云ふもの

は有難いものであります。此間も手紙を、その御主人から呉られました。それによれば私等は今此の様な悲境に陥つて居りますが、私の身に過ぎたものが一つございます。其れは妻でございます。と言つて居られます。其手紙を読んだ時、私は涙が出た。早速奥さんに、其事を言つて出しました。其御夫婦は、實に困難に出會ふて居られるけれども、幸福な夫婦であります。奥さんは、如何なる事に出會ふても、倒れぬだけの信念があります。其れを御主人が認められる。主人から茲まで感謝され、信頼されて居る奥さんは、どれ程立派な衣裳で飾つて居るよりも、何れ程高價な寶玉を持つてきらびやかにして居るよりも、幾ら美しいか清いか知れぬと、其人の事を考へる度に思ふのであります。

金に困らぬ法

金に困らぬ人間になるには、先づ金の嫌ふことをやめねばならぬ。金に聞いて見ると、

一、しどとぎらひの、なまけものがキライ

一、わがまゝ、せいたくするものがキライ
 一、じつい、しんせつのないものがキライ
 一、ふまじめで、やまぎのあるものがキライ、……どハツキリいふてゐる。
 この反對のことをして行く人間になれば、金にスカレるから、困らぬことになります。

落付き度いなごゝは贅澤だ

日に日に生きるが信心なり。この生きるといふ事が我等の毎日の仕事である。私は金銭のこどや、喰べることや、性慾に就ての問題を解決することを、其時々の仕事にして行き、その中で、日にく生き、先を樂みにして行き度いと念じて居る。話をする場合でも、去年の話を今年もすると云ふ様にしないで、其時々最もよい話をする事が出来ると思ふて居る。其時に自己の生活の全体を、其處にかけて行き。そして日にく立派に道が開けて行く事が、私自身の道が開けて行く事だと信じて居る。其時々々新たに道が開けないのは、即ち死ぬ事である。

「死ぬる用意をすな、生きる用意をせよ。」とあるが、木草でも一刻々々根も葉も働いて、一分間でも、其働きを止めて生きると云ふ事は出来ない。今生きて居ると云ふ所に生命がある。又どんな大きな団体でも、今生きる事を止めたら直ぐ死んで行くのである。それと同然、信心も日に々々生き、一生懸命の生活でなければならぬ。

かく申せば、信心とは大變な犠牲をかけなければならぬ様に見えるが、實は犠牲ではなくして、日々の生活が非常に愉快である。信心の生活は、創造の生活であるから、常に冒險が伴なふて居る様であるが、そこを、突き進んで行く處に、新しいものを生み出すことが出来るのである。

或人が私に、「自分は落着かんで困るが、君はどうか」と問はれたが其時に私は、「自分は不安ではあるが、安心しやうと思ふて居りません。落ち付かん事を、自分の仕事にして居る」と申しましたら、「君は詭辯を使ふ」と云はれましたが、生活の實際の有様を云ひ現は

すには、時に詭辯を用ひねば現はれぬ事もある。

斯様に不安の中にあつて、道を求めるより外はないのであるが、併し信心を求めて行きさえすれば、漸次に人生に對する確信が生れ、他の何物を持つても、購ふことの出来ない良い道が與へられ、實際問題に解決がついて行くのである。眞の安心を得る事は容易な事ではないが、一步々引き立てられて行外はありません。

むかうの心になつて見ること

世の中には、不良と云はれる人が随分ありますが、私の理想は、どの様な不良な人でも、それを攻めずに許して行く、見捨てたり、持てあましたりせぬと云ふことである。仮令先方が悪くても、其人の肚に入り、お前も辛いであらう、と云ふ様な氣分で、接して行き度いと思ふてゐる。

或時、人から頼まれて、精神病者の家へ行きました。それは、小學校の教員をしてゐた

婦人で、嫁に行つて、夫婦仲は良いが、其家の父が、家に置けぬと云ふので、去年の春發作し、今年又起つたといふのである。私は實家の両親に會つて話した。「本人がどう云ふのであるか分らぬが、大抵精神病者が出ると、身内の人が第一に苦しむ。これは他から想像する事が出来ぬ事で、深くお察しするが、どうか早く治してやらう、家節の名折にもなる、世間にも評判が悪いと苦しまれるでせう」と云ふと、

「貴方の仰せの通りである」と云はれる。

「それでは、早く治したいと、本人に向つて意見をなさるでせう。さうすると本人が餘計悪くなるでせう」と申すと、

「其通りです」と云ふ、

「それはいけません。さう云ふ様に、せずに居れぬ貴方も、本人の病氣がうつり、半病人になつて居るのである。さう云ふ事をする、本人は父母が攻める、困らせると思ひ。餘計焦らだち、つらいと思ひ、夜も眠られなんだり、外へ出たりする。それに對して、

取扱方が間違ふと、両方が一種の精神病者になる。心は傳染るもので、其處が危ないものである。貴方方が、よく心を鎮めて、本人の心になつて考へて見ると、本人の心は弱くなり、次々に變るのである。其人にかう思へ、あゝ思へど云ふても、豆腐にカスガイで、たとへ一時さう思ふても、精神が弱くなつて居るから、直ぐ變るのである。それを親類を集めたり、終いには祈禱者まで集めて、悪くして居るのである。監獄から出て來たものでも、攻めて居れば、本人は立つ瀬がない。殊に精神病者が、我儘を云ふ時には、當人の味方となり、私はお前の味方である、我儘を云はずに居れぬのであらう、私が聞いてやるぞ、と眞身になつて、察してやる事が大切である。所が、大抵皆が眞身でない、よい加減な事を云ふて居る。それで本人が淋しいのである。不良少年でもさうで、皆周圍の人が、一枚下の者の様に扱ふて居る。それで、反抗して、酒でも呑んでやらうと云ふ氣が起る。そこで、他の人は、病人を相手にせずとも、貴方方二人は、本人の心任せにし、本人について流れるが良い。川に舟を浮べて、水に任せて流す心になるのである。それでも、本人の云ふ通

りに、してやる事が出来ぬ事がある。其時には、お前の云ふ事は、そうせずには居れぬのであらう。出来る事なら、してやりたいが、出来ぬから耐へて呉れ、といふ態度が大切である。出來りや仕てやり度いと云ふ所が大事である。親心は其處である。それで本人が得心するが、そうでなしに云ふと、反抗心を起す。云ふ事を聞くと聞かぬとは、其精神があるか、ないかである。かく云ふ私が、云ふても聞かぬ事があるが、それは私の誠意が足らぬと思ふから、本人を攻めるより、私がつと心が落付き、細やかな所へ氣が付くやうになり、我心が無くならねばならぬと思ふ。恰度波が立つて居る様なもので、向ふの影が寫らぬのである。か様な事を話すと、そこのお母さんの、顔の皺が伸びて來た。娘に對する道が分つたのである。

それから、本人に會ひましたが、實は私は、本人に會う氣はなかつた。けれど、病氣を見て置き度いから會ふたのである。本人は、足が痛いので困ると云ふて居た。さうですかと云ひ、一時間程いろ／＼の話をしたが、少しも忠告がましい事は云はぬ。本人の主人は、

郡役所へ勤めて居るが、時々親切に、見舞ふて呉れて居ると云ふ。それでは御主人に、郡役所から歸りに、私の方へ寄つて下さいと、云ひ置いて、私は歸りましたが、翌晩来て下さいました。それで私の意見を話しますと、よく解る人で、

「私も今の今まで間違ふて居りました。いつそ片を附け様かと思ひ、困つて居りました所、昨日は両親も喜び、本人も心がなだらかになり、まるで夜が明けた様に喜び、これ程利目があるものかと思ひました」。

と云ふのです。本人は未だどう變るか知れぬが、両親や主人が變つて呉れたのは動きは無い。それで治る病氣なら必ず治り、それでも治らぬのは仕方がない。看病の方法は、これより他に仕方がない。

これは、精神病者の取扱だけでなく、家内の腹立の時でも、或は自分を憎んで居る人に對しても、憎み返さず、向ふの心に入つて見て、出来る事なら致しますが、出来ぬのだから耐へて下さいと云ふ風になると治まる。憎み合うとメグリ(罪障)を積みますが、其のメグリを解くことは、肚のどん底から、メグリを消して来るものが出て来なければどけぬ。心配が嵩じて病氣になつて居れば、それを溶かすものが出て来れば治らぬのである。信心は肚の中に難有い事が燃え移り、働を始めて来て、行爲が變り、今まで憎しみに、憎しみを以て返したものが、許すことが出来、詫びる事が出来、腹を立て向ふて来る者に、腹を立て返さぬのである。さうなつたのは、自身が幸福であるばかりでなく、漸次に他人をも、幸福にして行くことが出来る。

人をもてあまさぬ

信心が解ると、自分が強いて、どうせねばならぬと云ふ事が無くなる。大變責任がある様に思ふて居つたのが、軽くなるのである。信心を判らせられると、此自分を持つてをうて呉れるものがあり、自分を宙づりにして呉れてをる様に思はれる。自分が厄介にならぬ様になつたと云ふ人があつたが私もさう思へる。自分の爲にどうしやう、かうしやうと云

ふ事が無くなつて終ふ。それが自然に世の爲、國の爲に盡す事にもなる。自分の幸福が人の幸福になるから一番よい事である。人を幸福にせうとすれば、自分を犠牲にせねばならぬといふ事では、毎日困らねばならぬ、自分がさういふ風にして宙釣りにされてゐるといふか、親に抱かれてをる赤ん坊の如く、寒ければ暖かくして貰ひ、生きてゐる間は、生かして呉れるのであるといふ事になれば、他の人もさうであるから、人を持って餘さぬ事になる。人を引受ける事を厄介に思はぬ様になる。我子供でも厄介に思ふて、仕様事なしに育てゝをる人もある様ですが、信心が徹底と、親や、家内や子供を、厄介に思はぬ。厄介に思ふたら、美人でもキレイに見えぬでせう。厄介でないといふ事になれば、よく見へる。老人には、老人の良い處が現はれてゐる。私は、それが解らせられたのが、實に、幸福であると思はれる。厄介に思はぬと、婦人の方は美人に見へ、男子は皆好男子に見えるものです。……初めて會つた時、こんな人間は、せうしたら善いのかと當惑する氣がする事もあるが、大体前に述べた様な譯で、人間を持って餘さぬと云ふ事にして居るから、又いか

なる場合でも、捨て給はぬお力が、この人にも附纏ふて居らるゝのだと信じますから、私はどうかうと、決めて終はんでも、良いと思ひをして、時には金を呉れとか、何處其處へ連れて行けとか、勝手な事ばかり云ふ時には、ウルサイと、思ふ事もないではありませんが、大体に於て有り難いとも思ひ、矢張り尊いとも思ふ感じの中に於て、一緒にやつてをるのであります。さうすると、善いとか悪いとか、簡單にきめて了つて、取捨したりしてゐた時に、知る事の出来なんだ、よい所を人々の中に見出すことが出来る。

人間を持って餘さぬと云ふ事は、どこまでも神が引受けて下さるからと云ふ事に、徹底せねばいかぬと思ひます。人間をもて餘す位罪なことはない。いかなる人をも持て餘さぬ様になるのが信心である。或人が、私が人間を持ってあまさぬと云ふと、乞食を二十人程狩集めておこしてやると云ふ。それで宅の者が餘計其人を嫌ひますが、私は黙つてをります。それは乞食二十人が來たら一緒にやるまでいある、乞食二十人私の宅へ來る筈があつたら、其人を送らんでも來る、又來る筈が無かつたら、其人を送らうとしても來るものではない。

そんな拵らへ事では来るものでない。何時来るか判らぬものを、来ぬ先から寄越のは怪しからんと云つて、喧嘩をするのは愚なことである。乞食が二十人も来て呉れる様だつたら、私はもつと善い人間になれる。よい人間でなければそんなに来て呉れぬ。よく瀟車賃を呉れどか、又一夜どめて来れといふて来る人があるが、よく来て呉れたと思ひます。それは向ふが、信じて呉れ、ばこそくるのである。あそこには、金はあつても、呉れぬと思へば来はせぬ。

○ ○

人が用事をいふて呉れ、無心をいふて呉れる事は難有い事である。それを損な様に思ふて、拒絶するのは惜しい事だと思ふ。

私にさせ様とする事を、他人にさせたら私の用事はなしになり、神から信用がなくなる。ズット以前、私は頼まれて岡山縣の御津郡に講習に行つた事がある。各村を廻るので、夜は郡役所のある町に歸つて泊るのであるが、其往復車に乗りました。其車夫さんが、私の

話をする間、待ち乍ら聞いて居りまして、或日、仕事を有難くせねばならぬ、さうでないど人が用を云ふて呉れぬ様になる。といふ話をした飯り途に、其車夫さんが、私を車に乗せて走りながら云ふのに、

「あなたの話はようござりました」と云ふから、

「どこがよかつた」と尋ねたら

「仕事の處がよかつた。私がさうしてゐる。私等の仕事は、人がいふて呉れねば、出来ぬ仕事である。どこにお客があるやら判らぬ。車を曳いて歩いてゐて、客に出會へるやら、ズット待つて居て客が来て呉れるやら、自分では少しも分らぬ。客の方から、云ふて呉れなければ仕事は出来ぬ。ですから、私は客があつたら、難有いと思ふて曳いて行く。夜遅く戻つて寝て居ると、又どん／＼戸をたゝき起される事もあるが、さういふ時、今日行きともないと思ふ時もあるけれども、今仕事をあてがつて呉れて居るのである。之れを斷ると此次には、先方から見合せるといふ事になるかも知れぬ。さうなると私の仕事が無くな

る。それではならぬと思ひ、身体さへ續けば、何時も行く事にして居ります。」
 といふた事があります。處がよく味うて見ると、此車夫さんに限らず、皆仕事は自分で得やうとして、得られるものでない。商賣にしても同じ事で、人が買ひに来て呉れるので、出来るのだから、それが有難い。神が差向けられたのだと、感謝して客に接せねばならぬ。何に限らず、自分にさせて呉れる事は、私が此世に居るに就いて、させて下さる仕事だと思ひます。縁あつて世話をする者を、厄介に思ふものでは決してない。それで私は、いかなる人をも、持てあまされ様にしたい、もし人が持て餘して居るなら、私の處へ来て下されと云ふのであります。

私の必要とする神様は

人間生活の、ありのままの姿を、語つて聞かせて呉れるなら、どんな人の話でも、皆自分の生活の参考になるのであるが、其中でも、取り別け教祖とか、先覺者のお話は、吾等

を導いて呉れる。例へば金の問題に就いて、信心の教を求めて行くと、借金の問題でも、金を有つた場合の持方でも、明かに解決がつく。その他どんな問題でも、人を愛する道でも、社會國家に對する道でも、分らせられるのであります。

そして人を愛すると云ふても、實は愛して居るのやら、毒して居るのやら分らぬのがあつたが、唯己れの幸福の道を進んで居ると、自然に人を愛する事にもなり、社會國家に盡す事になつて居るのであります。故に己れ自身の、救はれた生活を振りかへつて見れば、其處に人に對する道も、金銭上の處理も、心持の處理も、自ら現はれて居るのである。茲に於て、宗教上の救ひに對して、讚嘆惜く能はず、之を値打にすれば、之れより尊い値打はない事と考へられるのである。そこで其信心をして行く信者位よいものはない事が分る。其他に何かよいものがある様に思へるが、實は皆中途半端のことである。

金を取扱ふのも、妻や子供を愛するものも、信心でやつて行く事が、最良の道である。私共に對して、生活上の様々な實際問題について、相談を受けましても、いつでも此信心生

活を以て、解決するのであります。信心生活ヌキにしては、或は職業を換へたり、或は金の居場所を換へたりして、三角のものを四角にすると、目先は變る様に見へますが、正体は少しも變つて居らぬので、信心を進めて解決をするより、他に大事なことば無いと思ふ、……私の必要とする神様は、私の前途を導いて下さる神様である。天地創造の神とか、萬能の神とか、全智全能の神とか、云ふ様な神様は、有るとも無いとも分らぬ。有るに越したことはないと思ふが、私の生活に直接の關係はありません。それよりも大事なのは、私を一步先に導いて下さる神様である。金錢とか、性慾とか、生活とか、他人との關係とか、名譽とか、地位とか、仕事とかの色々な生活事實に就いて、解決して貰ふことが一番肝要なのであります。

ほんごうに幸福になる話

信心の話は、自分が幸福になる事の話である。己れの生きて行くに、一番好い話なのである。生きて行くと思ふても、其の生き方に迷ひがあつたり、ヒョロ／＼の生き方であつたり、人を憎んだり、悪口を言ふたり、腹を立てたりする様な生き方であつては、それは本當の生き方ではない。本當の生き方と云ふものは、そんな生き方ではない。そんなことでは幸福ではない。自身の中から難有うなつて、不足が出る所が、不足が出ん、腹が立つ所が、腹が立たん。何と云ふ勿体ないことぢやらう、我心で、自分の心の中から、信心が湧き出る。いくらでも良いものが、自身の中から／＼湧き出て来る。先生に逢ふて、先生から貰うた信心ではない。附焼及や鍍金の信心ではない。此のもの(自己の信心)が良いものになるのである。此のもの(自己)が良い、この口が良い、此手がよい、此足がよい、このもの全体が良いものである。有難いものである。どうしてと云ふに、此口が良い事を言ふ、この手が良い事をする、この足が良いことをするために歩いて行く。この自身の正体が良いものであり、難有いものであると云ふ事になる。お肚の中から、難有い良いものが溢れ出て来る。そこで、いろ／＼の物を有たんでも淋しうないので。物を有たなければ淋

しいと云ふのは、お腹に良いものが無いと云ふ証據である。温みに替へて云ふなら、お腹の温い人は、外へ出てもさう寒くない。火は自身が温いばかりでなく、他のものをも温うする。自身が明るいと共に、他のものまで明るうする。といふ様に、自身が難有いばかりでなく、他をも難有うならせる事が出来る。お話を聞いた時だけ、其心になつたと云ふのではない。自分がさうなつて了ふ事になる。それで、さういふ風になつたらよい、それ程好い事になつたら良いと、誰も思うんだが、それはなれるんです。それ程の事であつて、それをすゝめられる譯がありません。

それで、さういふ信者(幸福者)になるには、凡そマア十年はかゝる。そんならといつて、誰でも信心をして十年経てば、信者になれるのかと云ふと、そんなものではない。本當に自分が心の中で、難有いと氣がついたのが、それが信心である。さうなるには、信心と云ふ事に志してから十年かゝると云ふのである。今迄の信心が、何うあらうとも、「私は十年

信心して居ります、私は十五年して居ります」と云ふても、それだけでは駄目である。「信心と云ふものは、それ程の事であるのか、それぢやあ、一つ改めて、俺は今此所に、新に志して、信心と云ふものを一つ覚めやう、信心と云ふものに基かう、信心と云ふものに就て、目醒めて研究をして見やう。」と云ふ事になるのが肝要である。

◎ 幸福者になる秘訣 ◎

しんばいや、はらだちを無くして、幸福になるには、おかねとしんせつ(愛)。この良いものを、充分に満足にする外はない。この二つの良いものが足らんでは、腹立ちや心配は止まぬ、不幸である。

どこぞに誰れか、この良いものを、自分が満足するやうに、してくれるものはないかと、他人をネラツてアテにしても、皆んな足らんものばかりだから、してくれられやう筈はなしのだ。

道が解るといふことは、自身といふもの、正体に目醒めて、自分は何も他人をタヨリに

したり、アテにして、チラツたりするやうな必要はないのだといふことになり、浅ましい
乞食根性や、盜賊根性を止めて、自身の中から、お金を親切を、なんぼうでも、湧か
し出して行くことの出来る人間になることである。

自身が、お金や親切を、湧かし出して行く、良いものを殖やすことの出来るものになれ。
さういふ人間になれば、眞實に幸福ぢや。やる氣になれば誰れでもキツトやれる。

一、しごどが、スキになる

一、わがまゝせいたく、せぬ

一、みんなに、しんせつにする

この三つがそろへば、眞實に幸福者になれる
一つ缺けてもいかに

かういふ人間にさへなれば、どこでも通用する。だれにでも通用する。たとい無一物で
も困らぬ。どうなつても幸福である、どこに行つても幸福である。人間其物が、價値ある
良いものとなるからである。いくら所有物に價値があつても立派でも、それをもつ人間に
價値がなくて、通用せぬものであつてはならぬ。どこにでも通用し、誰れにでも通用する、

良いものを、いくらでも、自身の中から、湧かし出すことの出来る人間になる。こ
れが幸福者になる秘訣である。

金光教要義

一、金光教

本教は、教祖が自己の生活を、眞實に營まれし道程を基礎として、開展せるものなり。

二、教義

されば、本教の教義は、眞實なる生活の表現に外ならず。

三、教祖の生活

教祖の生活は、立教の神宣に要約せらる。立教の神宣は、教祖の自叙傳にして、又本教
の教義なり。

「金子大明神此幣を切り界に、肥灰差し止めるから、其分に承知せよ。外家業を致し、農業へ出で、人が参り、

呼びに来て、又農業へ出で、又も呼びに来、農業する暇もなし、参詣に来た人も待ち、両方の差支に相成る。今日限り家業を止めて呉れぬか。

其方四十二歳の時、病氣で醫者も手を放し、心配し、神佛に願をかけ、全快致し、其時死んだものと思ひ、欲を放れて神を助けて呉れ。家内は後家になつたと思ひ呉れ、後家よりは優し、言も云はれ、相談もなる。小供伴ればつく農業してゐて呉れ。

此方の様に、實意可憐神信心致し居る氏子が、世間に何ぼうも難義して居る、取次ぎ助けて遣つて呉れ。神も助かり、氏子も立ち行き。氏子ありての神。神あつての氏子。繁昌致し。末々親にかかり。子にかかり。相世、互世で立ち行く。……(金光教祖の立教神宣……安政六年十月廿一日夜)

教祖の生活は、無我の生活なり。奉仕の生活なり。神に任せたる生活なり。自他一体感の生活なり。教祖は自己の生活が眞實の生活にして、又幸福の生活なる事を自覺せられて、求むるものにそを教へ傳へられたり。

四、本教の教義は生活を措いて他にあるべからず

されば、本教の教義は、各自の生活を措いて、また他にあるべからず。自己の生活が、

眞實にして幸福なるものたる事が、最始にして最終、唯一にして無二なる本教々義の研究なり。

五、信心

信心とは、救はれたる生活の自覺なり。我れ救はれたりとの自覺なり。

六、救……(おかげ)

救とは、われ神に生かさるとの自覺なり。神われに生き給ふの自覺なり。われ神と別ならざるの自覺なり。神われと一なるの自覺、これおかげなり。即ち、生神の自覺これなり。

七、信者

信者とは信心生活者の義なり、即ち、生神なり。教祖は信者なり。信を以て生活の基調となせる者、即ち信者なり。

八、教師

信者の生活自ら他に信を傳へ、以て他を救ふ。自ら救はれしものは他を救はざるべから

ず。他を救ふことの外に自己の生活なきなり。

かくて救はれし者より、救ひし者を見る時、これを教師と呼ぶべし。教師とは先覺なり。されど更に先覺あり、先覺を尋ねて最も初めに遡れば教祖に至る。教祖は更に自己の先覺を認められたり。即ち神これなり。神は信の源にして、人皆神を信じて信者となり、こゝに眞實幸福なる生活に入る。人間皆信者たるを以て最高の生活となす。信者たるとたらざるとは、重大なる問題なり、されどその他一切の區別……富者たると否、賢者たると否、高位にあると否等……は、さしたる問題にあらず。

九、教 會

一人の信者現はるれば、その幸福にして眞實なる生活は、自然、他の不幸にして虚偽なる生活に惱める者の思慕の的となり。信者を中心にして集り來り、救を求むる事となる。こゝに教會生る。教會は、救はれたる生活の、修養所なり。されば、救はれて信者となりしものは、教會を卒業することゝならざるべからず。教會を出で、又自ら救を他に及ぼす

事となるなり。かくして教會は、絶へず道を求むるもの入り來り、絶へず道を得たる者出で行く事、恰も學校の如くなるべし、これ教會の機能なり。苟も沈滞固陋なるは、教會の本來にあらず。

一〇、淨 生 淨 財

信者は無我の生活者、自他一体感の体现者なれば、身、心、財、名等苟も我執あるべからず。我執を以て、身、心、財、名を扱ふものは信者の幸福に至り得ざるものなり。未だ救はれざるものなり、不幸なる問題その身邊に盡さざるべし、進んで道を求めて止まざるを要す。

身心淨ければ、自他の爲めに盡して倦まず、功を功とせず、勞を勞とせず、無上の命法に降順して、日にく生きるのみ、財を扱ひ、名に處する事淨ければ、預るも我執の爲めならず、されば必要なる所に献げて無に歸するを厭はず、必ず持たん事を念はず、必ず持たざらん事を念はず、持つも我執の爲めに用ふる事なく、持たざるも己れの爲めに憂ふる

事なし。己れは神と一なるの自覺に生くる者なればなり。

持たざるも憂なく、持つも我執に用ひざるもの扱ふ時、身、心、財名皆淨く、然らざるもの扱ふ時皆不淨なり、淨ければ問題なく、自他共に救はれて人々相互に尊信和樂す。不淨なれば問題簇出し、自他共に傷つき、人々互に汚毒苦惱す。

一一、本教の事務

道を求めて人集まる、そこに自ら事務を生ず、人を扱ひ、財を扱ひ、名を扱ふが爲なり。事務は皆そを扱ふの間に、これに關與せる人、財、名凡て淨化せらるゝ事を目標として扱はるべきなり。この目標明らかなる時、事務は信心生活と一にして、同時に布教傳道の實際的表現となる。換言すれば、教内事務の扱ひ方は、本教信心の具體的表現なり。こゝに問題なく、清淨に扱はれ、これに關與せる人格、皆信者の眞實幸福に生くる時、本教は教祖を體現し、教義を闡明せりといふべし。

本教の教義は、生活の體現なれば、教團の實際を離れて抽象的に存するものにあらず。

教團組織の各機關が教祖の生活……生神の生活……を具體化して進む時、これを本教々義の生きたる表現となすべし。されば、本教の各機關は、常に教祖の生活によりて嚴正なる批判と指導を受けざるべからず。而してその單位は、自己一身の生活なり。

一二、自己の救

己れ一人救はれたる生活を營む事、これ唯一無二の大事なり。生神金光大神われを生かし給ふ也。われある所生神金光大神在します。他の何物なくも、信あれば立つ。他に何物あるも信なくば立たず。信とは、生神金光大神われと一なる事の自覺なり。この自覺を以て世間一切の間に、日にくゝ生きんのみ。

一三、世間

世間の悩みは無限なり。人種間の差別問題あり。我國民北米に排斥せられ、我國民、朝鮮人、支那人、水産社同人等に對し、好感を持たざるものあり、性の異なる間に問題あり、經濟上に問題あり。勞働問題、小作問題は、經濟上の理由と、人格上の理由とによりて、益

々解決を迫り來らんとす。思想上に於ても、政治上に關し、家庭に關し、教育に關し、急激なる變化起らんとし、人々煩悶皆適歸する所に迷ふ。

一四、信者の生活

この間に處して信心生活者の行く道は如何、與へられたる信、身心を驅りて臨機應變自在の活動をなし行くものなりと雖も、その行く手は自ら明らかなり。即ち、己れに我執なければ、持つも持たぬも一なれども、持たんとして争ひ、持ち得ずして悩むもの、中にありては、信者の生活は、自然、自ら持たずして悩まざる生活を表現せざるべからず。これ救の實際的表現なり。即ち、信者は自ら物質的に無一物の境涯に立ち、名に於て最下の位に處り、身心は勞を勞とせず、功を功とせず、自他の爲めに淨き活きを只營みて倦む事を知らず、この生活の幸福なる事を自覺し、體現して、以て一切の問題の渦中に進出すべきなり。救はれて自己の問題なくなれる上は、他の問題を看過する事能はず、問題の中へ中へと進みて、常に悩みを中心に立つべし。

自己に於て、有無不二なるが故に、信者の生活形式は、無の相を執るべきなり。何となれば、世、皆有に執して悩むが故なり。教祖の廣前奉仕の生活は、即ち、身、心、財、名、皆己れに於て無なるの生活なり、これ救はれたる生活者の自然の表現なり。一切の悩みを悩むが故に、自ら止む事を得ざるなり。

一五、本教々義の表現

かくて本教信者は、自己の生活に本教々義を體現して、その現代に最も自然なる表現を各自に營まん事、自他の爲めに切要なり。信者、信者をつくるの信心生活運動こゝに起る。これ本教の教義なり。

(大正十三年四月廿四日)

いのり

深く人生を思ふとき、其處にからみにからむ執着の撃縛は、そこから除いて見ても、限りも知られぬ根強さである。どこからどうしたらなせ、云へるわけのものでないことが知れる。それをじつとみつめて、合掌して祈る。

神よりの御光り輝かせ給ふにあらずば、せうともなるものでない。祈らせてもらひたい。祈らせてもらひたい。道の光を求め聲しきりに開ゆ。

道をハッキリと立て、今の相、今の気分の中で、色々の働さをして行く人が要る、それにしても、道の權威に徹底して、随ふ立場のいつてくならぬ事、いよく切に感じさせられる。

神様、此身をお役に立てさせて下さい。

(大正九、二、二三。正雄)

編輯後記

我が、高橋正雄先生は、極めて面真目に、且つ深刻に悩み、身を以て、修道の行を證せられる、其真劍さは、衆人注意の焦点となり、時に悲壯な感を抱かしめる程であります。鋭い理性の批評と、体験の効を積み、堅固な信念を得、確かな圓滿な道を、健かに歩まれつゝある。その日常生活の實状を觀て、古へ賢哲の風貌を偲ばせられる。私は、唯おほらかに、矛盾の世界より調和の世界へ……否定より肯定へ……といふ様な考へ方から、自身の、あてがれの心持ちを、現はして見たいといふ構想で、之れを編みました。

編輯したわけを書いて、それを先生のお目にかけてから、『模倣したり、誇張したりせず、自身を出せ。』といはれたので書きかへたくなりました。それは恐らく、其文中に先生を崇讃したやうなことを書いてあつたのを、注意されたのだらうと思ひます。『私のことを賞讃したり、なんぞ特別に變つた感心なことのやうに云ふたりするのは違うと思ふ。あなたは幸福者ですなあと、歡びを云はれるのなら、其通りです、有り難いことと、御禮を云

ひ度いのです。』……『私は人を教へたり、助けたりすることは出来ないから、先生氣どりになるのは嫌ひだ。亦人を弟子扱ひにするのは嫌ひぢやから、弟子はもたぬ。』と云はれる。其御心持からだらうと思はれます。

先生は先生、私は私、他の人は他の人、各自の道を忠實に歩まねばならぬ。其意味で皆んな別々である、別々であるが一つものであります。二不二は究竟の眞理である。先生を生かし、其處までにならして居るものは、私や皆んなをも、生かしてくれるものであらぬばならぬわけだから、眞に一つものだと思へ、さう云へる様になりたい。それだけのことを体験し、それだけの價値を現はしたい。今までの自分は、ハッキリさう云ふべく、餘りに弱く、餘りに悲惨であり、醜惡であつた。餘りに皮肉なりしことよ。

一つものが、いろ／＼な姿をとつて現はれるので、別ものだと思はれぬ、囚はれたる先入感が問題になる。凡ふる相を其儘に、深く、こまかく、廣く、ハッキリと観たい。自身の全体を、ありのままに、スラ／＼とゴダワリなく、現はすことが出来たら、凡てが

生きて、面白く、賑やかなことだらう。

今の自分は、未だ先生の様子に、『我れは神と一である、我れは救はれた、道を得た、幸福者になつた。』とハッキリ云へぬ。離れてゐる。高く遠きものとして仰いでゐるやうだ。先生の中には、無限に良いものがあるらしく、常にそれを觀せてくれる。私は眠つてはならぬ。私の眼が開いてゐる時、私の中からも、良いものを引き出してくれる様に思へ、それが私にとつて良いものである。そこで先輩として畏敬禮讃の念をはらひ、良き友として慕ひ、珍重がらんでは居られない。其良いものは、人の世の寶であり、國の柱とも云ふべきであらう。先生が今まで言はれたり、なされたり、書かれたものなど、先生にとりては、カスだとも思はれるのでせうが、私にはさうした意味で良いものだから、それを味はふて。自身もさうなり度いために、冊子にしたりするのです。言はひ私の生活であり、これは其第一歩であつて、次々に味はひつゝ、歩を進めたいと思つて居ります。

見出し等、私が勝手につけて拾ひ合せたのは、さうした私の心持ちからであります。拙

なき仕事が先生の徳を傷つけはせぬか、讀者をして徒らに勞せしむるに止まりはせぬかと恐れます。どうかお許し下さい。

表題をつけて下さつた先生の奥さん、表紙の装禰と印刷をして下さつた博多の、藤崎選象書伯と島井さん、それから此度冊子出版について、御厚意を寄せられし、新生舍同人諸氏に、あつく感謝いたします。

幸ひに先生の御人格の片影をでも、讀者にお傳へすることが出来て、お互結縁の榮どもなり、皆んな、溶け合ふて、賑やかな、幸福な世界を造り出す上の、一助ともなれかしと祈りつゝ、此稿を結びます。

大正十五年三月三十日

高橋重美

大正十五年四月一日印刷
大正十五年四月七日發行

定價金參拾錢

岡山縣淺口郡金光町大字大谷四百八十番地ノ一

編輯兼 發行者 高橋重美

岡山縣淺口郡金光町大字大谷三百三十番ノ内第一

印刷者 西東一

岡山縣淺口郡金光町大字大谷三百三十番ノ内第一

印刷所 資會社 大谷活版所



岡山縣淺口郡金光町大字大谷四百八十番地ノ一

發行所 新生舍出版部

○なつかしき皆様へ○

高橋正雄先生の、お導きによりまして、私共は、新しい生活の道を辿りたいのであります。金光町に於ける五、六の兄弟が、新生舎と互に稱へあつて居ります。金光教のお宮を造つてをる者もあります。新生萬年筆を造つて居る者もあります。各自の家業、めい／＼の家庭の中に、眞の道をさぐりあて、そして其白道を進まんとしてゐる氣持ちは、みんな一つであります。躓いたり、流れたり、眠つたりさめたり、千變萬化の心の旅、其ありさまを、筆にして、お互人生行路の、お辨當にしたいと思ひます。梅、ラッコキウ、ニンジン、海の物、河の物、シイタケ、カンピョウ、取り／＼の味を、如實に味はひ度いのであります。冊子をみち／＼と稱へます。御賛成の方は、その由を、お知らせ下さい。そして、どし／＼御馳走を書いて送つて下さい。

岡山縣 淺口郡 金光町

新 生 舎

新 刊

道を求めて

高橋正雄先生著

四六版上製函入
定價壹圓八拾錢

先生の修道日記とも云ふべきもので、元來他の人に讀んで貰ふ目的で書かれたものでなく、全く先生自身を告白されし、生活と魂の結晶であります

東京府巢鴨町宮下一六八八

發行所 篠山書房

振替東京三一七一三

岡山縣 金光町

取次所 金光教青年會本部

振替大阪三六〇一五

295
110

信念は日に新に生るる日々に新に生るる力也

金光で 万年筆を 製作販賣いたします

◎正 新生万年筆と申します

『品をよくして、値段を安くし度い』

そこを信念で新に生み出し度いのです

使つて見て下さい

- | | | | |
|----|-------|----|-------|
| 一号 | 壹圓 | 二号 | 壹圓參拾錢 |
| 三号 | 壹圓五拾錢 | 四号 | 壹圓八拾錢 |
| 五号 | 貳圓貳拾錢 | | |

岡山縣淺口郡金光町

新生舎製作

中村高 一郎商店

發賣元

電話五八番

終

